

## 英語英米文学

### ◇教員◇

教授：後藤和彦、新井潤美、渡辺明、阿部公彦

准教授：諏訪部浩一、中尾千鶴

助教：井上和樹

### ◇学生◇

学部：40名、修士課程：9名、博士課程：11名

英語英米文学専修課程は、英語学、英文学、米文学の3分野からなっており、学生諸君は、必修科目としてこの3分野の各概説・概論を履修することをのぞけば、だいたいのところ好みの分野の勉強に集中できる。その場合、何々先生のゼミに所属、といった小枠は存在しないから、諸君は自由に自分の方向をさだめることができる。そうして行きつ戻りつ、しだいに思いさだめたトピックや作品について卒業論文を書くことを、英文科ライフのいわばクライマックスとしてほしい。卒業論文は英文で30ページ(7,500語以上)。勉強になって思い出になるだけでなく、英作文からパソコン操作までもうまくなってしまおうという一石四鳥の事業である。その間、専門の近いスタッフや助教が、書き方や参考書目などについて積極的に相談に応じてくれる。

英語学は、ある時期の言語の特徴（古英語・中英語・初期近代英語・現代英語）を研究する共時的研究と、通時的な言語変化の諸相を研究する歴史的研究の2つに大別される。共時的研究でも歴史的研究でも、音声・音韻、語彙・形態、統語、意味・語用の各側面について考察を行うが、その基盤として、言語の一般的性質・仕組みについて正確な理解をもつ必要がある。一般言語理論と個別言語の実証的研究は相互依存関係にあり、両者あいまってはじめて、実質的な研究成果が得られるので、授業では、英語の詳細な事実の検討とその理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。

英米文学は、範囲が定めがたいほどひろい。その中心となる英米の文学がスタッフによってだいたいカバーされており、授業は以下にもうかがわれるように、従来から精読を旨としている。だがその後、たとえば英米

以外の英語圏の文学を、卒業論文などで学生諸君が自主的に研究することは支援されるし、児童文学、大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、美術や音楽と文学との諸関係などについても、興味をひろげてもらってかまわない。後二者については、例年卒論で取り上げる諸君があらわれるし、少しずつ授業で扱っている。また、言うまでもなく、具体的な作品の読解を重視する点で英米の地域研究とは異なるけれども、社会的、文化的アプローチは当然歓迎される。英米のものを主眼とした、文学理論・批評理論そのものの研究もちろん可能だ。要するにほとんど何をやってもよいのであり、スタッフはそれぞれの関心に応じて主だった作家・作品を扱うが、それをきっかけに自由な途をひらく、進取の気性こそここでは多とされる。

さて、個々の教員から授業・研究の内容をかいつまんで自己紹介しよう。

後藤教授：アメリカ文学、特にアメリカ南部の小説を主たる研究対象としている。南部は、自由と平等の国アメリカにあつて、戦争まで起こして奴隷制度を守ろうとした土地柄。その土地に、戦争の敗北からほぼ半世紀を経た 20 世紀前半、突如独特の文学が花開き、すぐれた作家が陸続と登場、この現象は「南部文芸復興(ルネッサンス)」とも称されるが、それはただの偶然だったのか。「偶然」といえば、無論それまでのこと。だが、もしもそれが偶然ではなかったなら、つまり「南部文芸復興」の百花繚乱が長い雌伏のときを経て訪れた南北戦争後の「戦後文学」の暴発なのだとすれば——この「もしも」が私の研究の起点にあり、私の研究をいまだに駆動している——ならば、一般に、戦争と、いや戦争の敗北と文学との関係はいかなるものか、と自然に問いが繋がっていったのは、やはり私が敗戦国日本に生まれたからだろうか。こうして戦後文学としての南部文学の秘密を探るべく、これとはあまりに違って見える祖国の戦後文学を横目で見ているうち、昨今ではむしろ南部文学の側を横目で見ているような気もしており、授業中にそのあたりを口走る可能性は高いが、アメリカ小説をできるだけ正しく深く読む努力をするというのがすべての建前であることは言うまでもない。

新井教授：専門分野はイギリス文学と比較文学。主な関心はイギリスの「階級」の概念と文学における表象であり、特にイギリスの小説と 18 世紀

以降のイギリスの演劇、文化を研究対象としている。「階級」との関連で、「郊外」「教養」「教育」「消費文化」「観光」「他者」といったテーマも扱っている。また、文学作品の映像化を中心としたアダプテーション研究、イギリス文学における「日本」の表象、そして最近ではイギリス文学、文化におけるエスニック・マイノリティの表象と受容の研究も行っている。

渡辺教授：統語理論が専門。高度な理論的判断がどのような形でデータの分析に反映されるかということに特に興味がある。最近は移動現象に焦点を当てて理論開発の研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、(素人がよく誤解するように)一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出していくかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

阿部教授：現代英米詩を主要研究対象とする。英語詩における〈伝統〉の持つ呪縛力に敬意を払い古典的な作品をも考察対象とするが、出発点はいくまで現代であり、それ故「今、この現代世界において、わざわざ詩が書かれることに意味があるのか?」、「このような環境で我々が詩を読むとはいったいどういうことか?」、「どうして詩について語る必要があるのか?」といった学生諸君が当然持つ(べき)であろう疑問と関わり合うような授業展開が理想である。また刺激的な作品世界を体験してしまったときの、「ああ、何かこれについて語りたい。何とかしたい」という、ムズムズするような衝動にはけ口を与えうる批評の可能性を探るのも大きな目標のひとつである。

諏訪部准教授：アメリカの20世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって19世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しい

スタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

中尾准教授：専門は生成文法統語論。言語における文法規則の言語間変異を、主に日本語と英語の比較を通して探っている。特に、文における語の移動や語の削除（省略）の規則について、それぞれの構文がどのような場合に認可されたりされなかったりするのかを言語ごとに考察している。また、子供がどのようにそれぞれの母語の規則を習得するか、子供の文法と大人の文法がどのように異なっているかといった言語獲得に関する問いにも興味がある。

上記の6名の専任教員が担当する専門科目（概論・概説や演習・特殊講義）に加えて、教養学部や学外から招いた非常勤講師の先生方による専門科目（英語学特殊講義・英米文学特殊講義）や学部後期課程の共通選択科目としての英語科目（「英語後期(Speaking, Writing, Reading)」や「アカデミック・ライティング(Introductory, Intermediate, Advanced)」）も開設されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会も常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムも開かれている。

本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職をめざして大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

以下、参考までに最近の卒業論文の題目を分野ごとに一覧しておく。（順不同）

#### <英語学>

The Japanese *Tough*-Construction and The Complementizers *no* and *koto*

Erroneous Use of Past Participles by Japanese Learners of English

The Comparison of Comparative Correlative Constructions in English and Japanese

A Study on Classification of Japanese Indirect Passives

< 英文学 >

Three Women of *The Moon and Sixpence*

What Ishiguro Expresses through Stevens in *The Remains of the Day*

*Pride and Prejudice*: The Presentation of a New Type of Heroine

The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*

Peer Pressure and Exclusion in *Brave New World* and *Ninety Eighty-Four*

Literacy and Esther's Character in *Bleak House*

What Is Wrong with Nelly Dean?: The Sense of Order in Emily Brontë's *Wuthering Heights*

Bernard's Narrative Failure in *The Waves*

Views on love in *The Taming of the Shrew* and *Kiss Me, Kate*

Law and Order on the Ship: The Language of Sailors in *The Bird of Dawning*

< 米文学 >

Interpreting Diaspora: An Analysis of Min Jin Lee's *Pachinko*

The Ending of Adventures of *Huckleberry Finn*

A Study of the Narrative of *Winesburg, Ohio*

Narrative and Context in Poe's "Ligeia"

Loquacious and Obscene Portnoy: The Self-Conscious Discourse of an Intellectual Jew

Narrative and Vision in *The Turn of the Screw*

Caroline Compson as the Mother in *The Sound and the Fury*

A Study of the Jewishness in *Goodbye, Columbus*

A Study of *Adventures of Huckleberry Finn*: On Huck and Jim's Separation and Reunions

F. Scott Fitzgerald's View of Class in *The Great Gatsby*

The Requirements for Being a "Beautiful" Grotesque: What George and Helen Get on the Hill in *Winesburg, Ohio*